

日本中小企業学会

2023 年 1 月

会 報

No. 82

会長就任にあたり

日本中小企業学会 池田 潔 新会長挨拶



池田 潔 (大阪商業大学) 新会長

<中小企業学会の新たなステージを拓く>

2022 年 11 月 1 日付で、日本中小企業学会第 15 代会長に就任しました。前任の佐竹隆幸会長が任期半ばで急逝されたことに伴い会長代行を務めてきましたが、今回、会長に選出されました。日本中小企業学会の創設が 1980 年ですから、40 数年が経ちます。初代会長は、「中小企業は異質多元な存在である」で著名な山中篤太郎先生ですが、そこからこの日本中小企業学会は、日本の中小企業研究を代表する学術研究団体として発展し、今日に至っています。

学会は、研究従事者が自己の研究成果を発表し、その科学的妥当性をオープンな場で検討討議する場です。日本中小企業学会でもこれまで、様々なテーマで統一論題や自由論題が報告され、議論されてきました。自然科学の分野では、新たな発見や理論でも、白黒がはっきりし、

衆目も納得することが比較的多いように思います (門外漢なので間違っているかもしれません)。しかし、社会科学の分野では、様々な考察や意見が飛び交い、一つの見解に収斂することは難しいように思います。ただ、そのことは社会にとってはむしろ健全だと考えます。とはいえ、自然科学にしても社会科学にしても科学していることに変わりはありません。中小企業研究も社会科学の一分野として、社会に役立つ学問であることが問われています。

こうした視点で中小企業研究を俯瞰しますと、中小企業の本質や抱える問題・課題等を巡って様々な議論が行われてきましたが、資本主義社会そのものが揺らぎ、変質してきている現在、中小企業研究にも新しい視点や変革が求められていると言えましょう。ただし、日本中小企業学会も学会という組織である以上、これまでの歴史・伝統を引き継ぎながら変革していく必要があります。前会長の佐竹隆幸先生や元会長の岡室博之先生の言葉を拾うと、「研究成果の地域社会への還元」「変革の時」でした。時々の社会環境変化や、学会組織の現状を踏まえ、どのような思いで学会を率いていこうとされたのかの思いが凝縮されているように思います。

現下の中小企業が置かれている状況として、これまで日本の成長を支えてきた中小企業が、後継者難による事業承継問題や技能承継問題に直面していること、グローバル化の深化等により、中小企業問題の大宗を占めてきた下請系列が崩壊しだしていること、DX をはじめとする新技術にいかに対応し、イノベーションに取り組んでいくかなど、問題や課題が山積しています。こうした問題や課題に、日本中小企業学会として真摯に対応していくことはもちろんですが、他学会に所属する異分野の研究者との交流を図ることで、新たな知見の獲得や、創発を生むことが期待されます。このため、次回の全国大会ではトライアル的に工学分野の研究者を招聘し、特別講演を組み入れる予定です。

昨秋、韓国中小企業学会との連携協定を締結しましたが、今後、国際的な学术交流をよりいっそう推進していきます。今般のコロナ騒動では、広くオンラインの利活用が進みましたが、学会においてもオンラインを活用した部会間の交流や、テーマを決めた研究会の開催、さらにはオンライン・ジャーナルの創設等も実施に向けた重要な取組課題です。

今後、若手研究者をはじめ、様々な方々のご意見を取り入れながら、学会活動がよりいっそう充実し、活発化するよう尽力していく所存です。これから3年間、事務局ともどもよろしくお願いいたします。

※ 新会長挨拶は、YouTubeでもご覧いただけます。リンク先：<https://youtu.be/SjqNX-K5aJ0>

日本中小企業学会 第42回全国大会

日本中小企業学会第42回全国大会が2022年9月24日(土)、25日(日)の2日間にわたり、東洋大学にて開催された。

統一論題は「コロナ禍と中小企業研究～学際領域としての中小企業研究の再考～」をテーマに報告・討論が行われた。また、今大会は自由論題で6つの分科会が設けられた。

今大会も信金中央金庫協賛による国際交流セッションが開催され、「How important is it to combine cognition and emotion in entrepreneurship research?」をテーマに報告が行われた。

会員総会では、2021年度事業報告・決算報告ならびに2022年度の中間決算報告が行われ、2023年度事業計画と予算案が承認された。

日本中小企業学会 第42回全国大会記

日本中小企業学会第42回全国大会は、2022年9月24日(土)と25日(日)に、山本聡氏を準備委員長として、東洋大学の白山キャンパスで開催された。全国大会はコロナ禍により、これまで2回連続でオンライン(zoom)開催となったが、今回は3年ぶりに現地開催(zoomを活用したハイブリッド形式)となった。開催校の感染症対策のため現地参加は100人までに制限されたが、両日で延べ100人を超える現地参加者、100人以上のオンライン参加登録者がいて、盛況であった。これまでのオンライン開催の経験もあり、準備委員会のご尽力もあって、ハイブリッド形式での開催は円滑に行われた。

今大会では14件(初日に8件、2日目に6件)の自由論題報告の他に、例年通り、国際交流セッションと統一論題セッションが行われた。理事会(役員会)と会員総会も3年ぶりに対面とオンラインのハイブリッド形式で開催されたが、セッションの座長・報告者と討論者には原則として現地参加が要請されたこともあり、役員会には役員の多くが現地で参加した。感染症対策のため、懇親会はパーティー形式でなく、東洋大学の学生による「ガラ・コンサート」として開催された。そのため、東洋大学の江口悦子学長のごあいさつも、懇親会の冒頭でなく、

会員総会の前に行われた。ガラ・コンサートには、東洋大学の箏曲研究会と混声合唱団のメンバーが登壇し、学生による日本舞踊も披露され、好評を博した。このように懇親会に開催大学の学生が出演することは、今後の全国大会の参考になるだろう。

今年度の若手研究奨励賞(準賞)は浜田敦也氏(中京大学)に授与された。受賞論文は「先代経営者による事業承継後の調整活動—役割とスキルに注目した分析—」である。台風で東海道新幹線が運行を停止したため、浜田氏は会員総会における授賞式にはオンラインで参加し、翌日の統一論題セッションの冒頭で池田会長代行から賞状と副賞を受け取った。

自由論題報告については(1)企業家/起業家、(2)事業継続、(3)中小企業支援、(4)中小企業研究、(5)地域と中小企業、(6)経営資源と差別化の6つの分科会が設定された。私自身が第3分科会の報告者であり、同じ時間帯の他の分科会に参加できず、第3分科会と2日目の第5分科会のみ参加したが、朝一番から多くの聴衆が参加し、報告と議論が円滑かつ活発に行われた。今回は例年より応募者が少なく、採択される報告も少なかったが、次回以降はより積極的な応募を期待したい(より多くの若

手研究者の報告を期待するが、私のような中高年の研究者も積極的に応募すべきだと思う)。

今大会の国際交流セッションは、例年通り信金中央金庫地域・中小企業研究所の協賛をいただき、大野英明所長から開会のごあいさつをいただいた。招聘講演者は SUNY (ニューヨーク州立大学) 韓国校の Chihmao Hsieh (謝之茂) 准教授である。Hsieh 氏は中国系米国人で、米国の名門ワシントン大学セントルイス校で博士号を取得後、アムステルダム大学や延世大学 (韓国) でキャリアを積んだ若手の俊英である。Hsieh 氏は当初、オンライン報告の予定であったが、直前にビザを取得できて急遽来日し、現地参加が叶った。対面報告に向けた Hsieh 氏の熱意と招聘者である山本聡氏 (東洋大学) のご尽力に敬意を表す。報告は英文資料に基づいて英語で行われたが、視聴者の理解を深めるため、司会の山本聡氏が日本語の抄訳を作成し、報告内容を簡潔にまとめた。

報告論題は「How important is it to combine cognition and emotion in entrepreneurship research (企業家研究において認知と情動を結びつけることがいかに重要か)?」である。これは正に、今大会の統一論題セッションのテーマと直接関連する論題である。経営学と心理学などの学際的なアプローチが近年の企業家研究の世界的な潮流になっている。Hsieh 氏の報告は企業家研究のトップジャーナル掲載論文に見られる最新の研究動向を踏まえて、企業家の情動 (好奇心、不測、驚嘆、困惑) が企業家の認知プロセスと知識創造活動につながり、それがまた情動に影響するという動的なモデルを提起する。企業家の 4 つの情動のそれぞれについて近年、研究が急速に進展しているが、これらの情動の相互作用はほぼ未開拓の研究領域であるとして、それを踏まえた研究の方向性が示された。これに対して、そのようなダイナミックな過程をどのように定量化するのか、またその時々状況に依存する情動をその状況から切り離して定量化できるのかなど、本質的な質問が出た。

統一論題セッションでも議論されたように、本来、学際的な研究領域であるはずの中小企業研究にお

いて、日本では学際的な研究がまだほとんど進展しておらず、国際的な研究動向とのギャップが顕著に見られる。その点で、このセッションの報告が、参加した多くの会員にとって、今後の研究への刺激になることを期待したい。なお、報告後の質疑の時間が短い上に、感染症対策で飲食を伴う懇親会が開催できず、また Hsieh 氏が直前までオンライン参加の予定だったこともあり、参加者が Hsieh 氏と懇談する機会が用意されなかったのは残念である (私はセッション直後に舞台裏に押しかけて、Hsieh 氏とお話する機会を無理に作ったのである)。

大会の最後を飾る統一論題セッションは「コロナ禍と中小企業経営～学際領域としての中小企業研究の再考～」を論題に掲げて開催された。池田潔会長代行 (大阪商業大学) と堀潔副会長 (桜美林大学) を座長として、4 つの報告と討論およびパネル・ディスカッションの形で行われた。

第 1 報告「学際領域としての中小企業研究の再考—地域研究の経験の限りにおいて—」(中京大学・寺岡寛氏、討論者: 中京大学・浜田敦也氏) は、地域研究 (米国、北欧) における国際共同研究の経験を踏まえて、学際研究とは何か、どのように進めるべきかを具体的に論じ、さらに今後の本学会の運営を展望するものであった。各参加者の研究が混じり合わずに残る「サラダボウル」型とひとつの大きな研究に融合する「メルティングポット」型の学際研究を比較し、いかにして長期的に「メルティングポット」型の学際的な共同研究を成功させるかが、報告者自身の「失敗」例を含めて検討された。これに対して討論者の浜田氏は、学際研究一般の視点から、また中小企業研究自体の学際性の視点から多くの鋭い質問を提示した。残念ながら報告者がそれに個別に答える時間はなかったが、私見では、そのような討論こそが、このセッション、そして今大会の一番の山場になったであろうと考える。

第 2 報告「日本人が仕事に求めるもの、高度成長期末からの変化と起業家活動に関する『非経済学的』考察」(東洋大学・安田武彦氏、討論者: 日本大学・鈴木正明氏) は、起業動機として「収入を増やす」(経済的動機) ことよりも「自由に仕事をする」(非

経済的動機) ほうが重要であるという調査結果に注目し、5年ごとに継続実施されているNHK「日本人の意識調査」の匿名個票データ(1973~2013年)を利用して、「理想の仕事」の条件として「独立」(起業、自由業)を挙げる回答者(男性)の属性とその変化を分析する。その結果、1990年代までは若年層が独立を理想とする傾向が見られたが、2000年代以降それが見られなくなったことと、独立を理想とする者の意識も自身の健康志向から社会貢献重視へと変化したことが明らかになった。これにより、利潤動機に基づく経済学の「職業選択モデル」の限界と、今後の研究の方向性が示された。

第3報告「ADHD 起業家研究から見えてきた新たな企業家像~高い不確実性への適合~」(大阪経済大学・江島由裕氏、討論者:中京大学・弘中史子氏)は、企業家的志向性(entrepreneurial orientation:EO)に関する自身の研究に基づいて、ADHD(注意欠陥多動性障害)とEO、企業家行動の関連に着目する。そして、海外の最新の学際研究の動向を踏まえて報告者自身の最近の研究成果を紹介し、1)ADHD 資質は事業創造に肯定的な影響を及ぼす可能性が高いが、2)ADHD の診断という「導き」が触媒となって肯定的な自己認識が生まれ、企業家行動に繋がることを指摘する。最後に、ADHD 企業家を含む新たな企業家像を考慮する今後のアントレプレナーシップ研究の方向性が提唱される。

第4報告「コロナ禍と中小企業の採用:『KOBE 採用イノベーションスクール』の実施からみる成果と課題」(武庫川女子大学・山下紗矢佳氏、討論者:東洋大学・山本聡氏)は、研究蓄積の少ない中小企業の採用行動に注目する。中小企業研究ではまだまだ使われていないアクション・リサーチの手法に基づいて、中小企業の採用力向上のための実践的学習プログラム「KOBE 採用イノベーションスクール」を独自に企画・開発した経緯、プログラムの実施のプロセスと成果、得られた知見を詳しく紹介する。講義からの学びだけでなく、対話による参加者の気づき、そしてそれを成果物に反映させる積極的な学習の場を創出することが、中小企業の採用力向

上に効果的であることが示された。

これらの報告への各討論者の質問とコメントは、それぞれの報告の内容に即した重要なものであったが、紙幅の制約により、ここでは詳細な説明を割愛する(なお、第4報告の討論者である山本聡氏が、大会準備委員長、自由論題報告者、国際交流セッションの企画・司会・翻訳まで務めたことを、ここに改めて付記し、労いたい)。最後のパネル討論で、報告者4人、討論者4人、座長2人の合計10人が壇上に並ぶのは壮観であったが、時間の制約の下で、壇上の討論や参加者との質疑の時間がかなり短くなってしまったのは、参加者としてはやはり残念であった。現地の参加者からは、学際的共同研究の進め方や本学会として必要な取り組みについて(私自身を含めて)いくつか質問やコメントが出された。

今大会の統一論題セッションは、報告の内容はそれぞれに面白いが、全体としての統一感に欠ける嫌いがあった。主題に掲げられたコロナ禍にはほとんど触れられることがなかった。副題(事実上の主題)である「学際領域としての中小企業研究」を正面から扱ったのは第1報告と第3報告に限定されるが、第2報告では経済的な起業動機と非経済的な起業動機が対比され、第4報告はアクション・リサーチの手法により新たな学際的研究領域の開拓を目指すものであり、その点ではすべての報告で「学際領域としての中小企業研究」が意識されていた。しかし、各報告に共通する具体的な視点や論点が少なく、学際研究についてパネル討論が盛り上がったとは言えない。また、前日の国際交流セッション報告(アントレプレナーシップの学際研究の国際的動向)の内容は、統一論題セッションのテーマに直結するものであるが、残念なことに全く言及されなかった。

しかし、「学際領域としての中小企業研究」という、本学会の存在意義に関わる重要なテーマを事実上の主題として掲げ、若手からベテランまでの報告者・討論者を会員の中から揃えたプログラム委員会、特に大会準備委員長の思いを、高く評価したい。このセッションの経験が、本学会における今後の学際研究の活性化(特に関連分野の研究者を引き込む学際研究の場の構築)、更には学際研究領域としての

中小企業研究の活性化の新たな出発点となることを期待する。

池田潔会長代行が初日の懇親会の冒頭あいさつ（次期会長としての所信表明）で、本学会の山中篤太郎初代会長のことばとして紹介した通り、中小企業研究は本質的に学際的な研究領域である。正にそこに中小企業研究の魅力と重要性があると私は考えている。だからこそ、本学会を今後一層、学際的な研究の発表と交流の場として発展させたいという次期会長の所信に、私も心から共感できる。

今大会は3年ぶりに現地（ハイブリッド）で開催され、現地参加者もオンライン参加者も多数に上った。私の知る限り、オンライン接続に特に障害はなく、ハイブリッド開催は成功したと言える。しかし、統一論題セッションでも国際交流セッションでも、私が参加した限りでは自由論題セッションでもオンライン参加者から質問がなく、オンライン参加者が質問しづらいのではないかというハイブリッド開催の課題を改めて認識した。オンライン参加にもメリットがあり、今後もハイブリッド開催が続く可

能性はあるが、現地参加者とオンライン参加者の機会の公平を確保することが、今後も重要な課題となるだろう。

今大会は東洋大学がコロナ禍で初めて大学キャンパスでの開催を認めた学会大会であるということで、開催校である東洋大学並びに江口悦子学長のご支援とご配慮に感謝したい。東洋大学の許可と支援がなければ、全国大会の現地開催は叶わなかった。また、今大会の開催を支えた池田潔会長代行（次期会長）と本部事務局（山下紗矢佳事務局長）、プログラム委員各位（堀潔委員長）、そして特に山本聡委員長を初めとする大会準備委員会、東洋大学の学生・職員諸氏に、最大限の敬意と感謝を捧げたい。

来年度の第43回全国大会は、文能照之氏を準備委員長として、2023年10月の週末に、中小企業の街である東大阪市の近畿大学で開催されることになった。来年度もハイブリッド開催になるかもしれないが、多くの会員と現地でお会いできることを期待している。

（一橋大学 岡室博之）

地区部会・支部別活動報告

<東部部会>

第1回

日時：2022年1月30日（日） 場所：Zoomによるオンライン開催 参加人数：24名

（1）山本聡（東洋大学）

「個人的企業家志向性とワーク・パフォーマンス」

第2回

日時：2022年5月22日（日） 場所：東洋大学白山キャンパス8号館 8204教室（対面とオンラインでのハイブリッド） 参加人数：28名

（1）山本聡（東洋大学）

「自営業者のバーンアウトと企業家的ストレス、個人的企業家志向性」

（2）鹿住倫世（専修大学）

「見えない女性起業家に光を当てる」

第3回

日時：2022年8月8日（月） 場所：Zoomによるオンライン開催 参加人数：23名

（1）吉原元子（山形大学）

「産地中小企業の「内製か外注か」選択における決定要因」

（2）松下幸生（千葉商科大学）

「中小の部品・製品メーカーにおける劣位性—外注取引関係にある注文生産をしている企業に対する資源の依存性—」

第4回

日時：2022年8月11日（木） 場所：Zoomによるオンライン開催 参加人数：23名

（1）江口政宏（商工総合研究所）

「中小企業のデジタルトランスフォーメーション」

（2）額田春華（日本女子大学）

「生活に関わる社会的課題解決に取り組む女

性企業家たち：社会企業家育成に関する一考察」

第5回

日時：2022年8月19日（金） 場所：Zoomによるオンライン開催 参加人数：20名

（1）松井雄史（日本政策金融公庫総合研究所）

「小型衛星開発による地域経済活性化の可能性—福井と九州の事例から」

(2) 鈴木正明 (日本大学)

「反平等志向的な規範は起業活動を活発にするのか？」

<東部部会北海道支部>

第 1 回

日時：2022年3月21日 (月) 場所：Zoomによるオンライン開催 参加人数：10名

(1) 中村宙正 (東京成徳大学 非常勤講師)

「労働財政学と中小企業」

<中部部会>

第 1 回

日時：2022年7月16日 (土) 場所：愛知淑徳大学 星ヶ丘キャンパス・Zoomによるハイフレックス 参加人数：24名

(1) 林尚志 (南山大学)

「“知の専有vs.知の共有”：現地人材の登用にあたり対照的な状況が生じるメカニズム」

(2) 玉井由樹 (福山市立大学)

「組織における経営者と従業員の企業家的な志向性の関係性」

(3) 寺岡 寛 (中京大学名誉教授)

「学際領域としての中小企業研究の再考：地域研究の経験の限りにおいて」

<西部部会>

第 1 回

日時：2022年1月8日 (土) 場所：大阪商業大学 (対面とオンラインでのハイブリッド) 参加人数：32名

(1) 三宮直樹 (大阪商業大学 (院))

「地域中小企業における多様性の増加と競争優位の確立～ケイパビリティとしてのダイバーシティ・マネジメント～」

(2) 生駒朋己 (関西学院大学 (院))

「創業者と事業承継者の企業家精神の異同性—社会情緒的資産からの考察—」

第 2 回

日時：2022年5月21日 (土) 場所：大阪商業大学 (対面とオンラインでのハイブリッド) 参加人数：42名

(1) 亀井芳郎 (亀井コンサルティングオフィス)

「中小企業の戦略マネジメントについての考察 (仮)」

(2) 内海美保 (関西学院大学 (院))

「中小企業における知的資産経営報告書の現状と課題」

第 3 回

日時：2022年7月23日 (土) 場所：大阪商業大学 (対面とオンラインでのハイブリッド) 参加人数：37名

【第一会場】 (ハイブリッド)

(1) 中原寛子 (神戸大学 (院))

「ワークプレイスラーニング研究の技能実習への適用可能性」

(2) 近藤健一 (兵庫県庁)

「基礎自治体の中小企業政策実施体制の現状と課題：兵庫県内市町における内部組織の観点から」

(3) 山下紗矢佳 (武庫川女子大学)

「コロナ禍と中小企業の採用：『KOBE採用イノベーションスクール』の実施からみる成果と課題」

【第二会場】 (オンライン)

(1) 中村嘉雄 (芸術文化観光専門職大学)

「地方における起業の促進策について- 兵庫県香美町・朝来市の事例を踏まえて -」

(2) 堀越昌和 (福山平成大学)

「コロナ禍における中小企業経営者の健康問題と事業継続リスクに関する研究」

(3) 関智宏 (同志社大学)

「日本の「中小企業研究」と「日本の中小企業」研究—日本における中小企業研究の展望—」

<九州部会>

第 1 回

日時：2022年8月19日 (金) 場所：福岡大学 (オンライン形式 (Webex方式)) 参加人数：10名

(1) 藤本寿良 (大阪経済大学)

「中小企業の健康経営について」

(2) 大田康博 (周南公立大学)

「旧技術ユーザーによる顧客関係の戦略的再構築：久留米絨織元下川織物における「刷り込み」プロセス」

(3) 黄完晟 (九州産業大学)

「中成長期 (安定成長期) における地域経済の成長と複数事業所企業の貢献」

日本中小企業学会 2022年度決算報告(2021年11月1日～2022年10月31日)

《収入の部》	2022年度予算 (a)	2022年度決算 10月31日	差額
I 前期繰越金	9,842,185	8,197,643	-1,644,542
II 会費収入計	3,858,000	3,369,000	-489,000
(1)個人会員会費収入	3,218,000 (503口)	2,769,000 (467口)(b)	-449,000
(2)賛助会員会費収入	640,000 (32口)	600,000 (30口)	-40,000
III その他収入	300,000	305,000	5,000
(1)協賛金収入	300,000	300,000	0
(2)雑収入(c)	0	5,000	5,000
合計	14,000,185	11,871,643	-2,128,542
期間収入総額	4,158,000	3,674,000	-484,000
《支出の部》			
I 全国大会開催経費	800,000	800,000	0
II 地区部会経費	300,000	300,000	0
(1)東部部会費	145,000	144,706	-294
(2)中部部会費	38,000	38,235	235
(3)西部部会費	104,000	104,118	118
(4)九州部会費	13,000	12,941	-59
III 会報発行経費	300,000	10,660	-289,340
IV 年報編集費	150,000	150,000	0
(1)レフェリー謝金	70,000	70,000	0
(2)郵送費	60,000	60,000	0
(3)役務費/事務費	20,000	20,000	0
V プログラム委員会経費	50,000	0	-50,000
VI 国際交流経費(学会報告補助)	300,000	0	-300,000
VII 若手研究奨励経費	130,000	30,735	-99,265
VIII 本部経費	3,340,000	2,512,948	-827,052
(1)郵送費	30,000	17,818	-12,182
(2)旅費	100,000	97,026	-2,974
(3)事務担当謝金	200,000	199,000	-1,000
(4)年報発行費・事務費	1,500,000	1,274,405	-225,595
(5)国際交流費	550,000	561,004	11,004
(6)事務用品費	200,000	194,331	-5,669
(7)役員選出費	200,000	107,705	-92,295
(8)名簿発行費	0	0	0
(9)ウェブ管理費	500,000	12,144	-487,856
(10)雑費(d)	60,000	49,515	-10,485
IX 予備費	50,000	0	-50,000
X 次期繰越金	8,580,185	8,067,300	-512,885
合計	14,000,185	11,871,643	-2,128,542
期間支出総額	5,420,000	3,804,343	-1,615,657

(a)2022年度予算は2021年度会員総会の資料によるものである。

(b)個人会員は467口のうち、シニア・院生が50口であった。

(c)余剰会費納入による。

(d)雑費は、銀行振込手数料、郵便払込・振込手数料による。

2022 年度決算概況

2022 年度（2021 年 11 月 1 日～2022 年 10 月 31 日）の収支決算は、130,343 円の赤字であった。なお、具体的内容は以下の通りである。（前年度 2021 年度は 299,645 円の黒字）

《収入の部》

2022 年度の収入総額は 3,674,000 円であり、うち会費収入は 3,369,000 円であった。会費収入の内訳は、個人会員 2,769,000 円（467 口）、賛助会員 600,000 円（30 口）である。個人会員 467 口のうち、シニア・学生会員は 50 口であった。なお、個人会員の年会費は 7,000 円、学生会員とシニア会員の年会費は 4,000 円となっている。

今年度決算時、個人会員会費収入は予算に対し 36 口減となった。会費収入合計では予算に比べ 489,000 円と大幅減となっている。その他収入は協賛金等で 305,000 円であった。

対前年でも、収入総額 596,460 円減、会費収入で 525,000 円の減少となっている。

《支出の部》

2022 年度の支出総額は、3,804,343 円であり、予算を 1,615,657 円下回った。紙媒体による会報発行経費の削減、さらに本部経費関連の費用では予算に対し 827,052 円支出減となっている。その内訳として、学会ホームページ等の再構築予算であるウェブ管理費の継続検討による予算未執行分、またプログラム委員会経費、国際交流経費（学会報告補助）の予算執行が無かったことが支出を減少させた主な要因となっている。

対前年では、支出総額 166,472 円の減となっている。

《繰越金・資産内訳》

2021 年度決算時の次期繰越金は 8,197,643 円であった。

本決算では 2023 年度への繰越金（2022 年 10 月 31 日現在の残高証明額と同様）は 8,067,300 円となっている。2022 年度予算の次期繰越金額 8,580,185 円から 512,885 円のマイナスとなり、概ね 2022 年度会費収入総額の減少分に相当するかたちとなっている。

なお、資産（預貯金等）の内訳は、下記の通りである。

現金	ゆうちょ銀行 振替口座	合計
145,149 円	7,922,151 円	8,067,300 円

若手研究奨励賞

2022 年度の「日本中小企業学会若手研究奨励賞」には、浜田敦也会員の「先代経営者による事業承継後の調整活動—役割とスキルに注目した分析—」が授与された。

国際学会報告助成

「国際学会で中小企業に関する研究報告を行う本学会員に対する経費助成」には、2022 年度は 2 月および 8 月に助成希望者の募集を行ったが、応募者はなかった。

日本中小企業学会・第 15 期 各役員 (2022 年 11 月～2025 年 10 月)

- 会 長 池田 潔
- 副 会 長 (東部) 岡田浩一、(中部) 弘中史子、(西部) 太田一樹、(九州) 大田康博
- 常 任 理 事 (東部) 岡室博之、高橋美樹、堀 潔
(中部) 大前智文、林 伸彦
(西部) 関 智宏 (国際交流担当)、文能照之 (若手対策担当)、本多哲夫、
前田啓一
(九州) 笹川洋平
- 理 事 (東部) 鹿住倫世、許 伸江、駒形哲哉、遠山恭司、長山宗広、安田武彦、
山本篤民、山本 聡
(中部) 寺岡 寛
(西部) 梅村 仁、大貝健二、糸野博行 (2024-25 年度編集委員長)、西岡 正、
藤川 健 (2023 年度編集委員長)、山下紗矢佳
(九州) 笹川洋平 (常任理事兼任)
- 幹 事 (東部) Kan Viktoriya、許 伸江 (理事兼任)、今野喜文 (北海道支部担当)、
鈴木正明、丹下英明、土屋隆一郎
(中部) 浅井敬一郎、宇山 翠
(西部) 大熊省三 (会員拡大担当)、瓶内栄作、田代智治 (事務局長)、
長谷川英伸、林 幸治、平野哲也
(九州) 遠藤真紀
- 監 事 (中部) 渡邊俊三、(九州) 出家健治
- 地区部会担当 (東部) Kan Viktoriya、許 伸江、鈴木正明、丹下英明
(中部) 大前智文、浜田敦也
(西部) 長谷川英伸、山下紗矢佳
(九州) 足立祐介
- 本 部 事 務 局 田代智治 (事務局長)、木下和沙、須佐淳司、津田泰行、三浦佳子、李 良姫
-

本部事務局からのお知らせとお願い

日本中小企業学会役員改選に伴い、本部事務局連絡先が武庫川女子大学経営学部 (山下紗矢佳事務局長) から変更になりました。第 15 期本部事務局は長崎県立大学経営学部 (田代智治事務局長) になります。新役員は上記の通りです。なお、新事務局の連絡先につきましては会報の末尾をご確認ください。

また、今年度 (2022 年 11 月 1 日から 2023 年 10 月 31 日) からの会費につきましては納入方法が変更となる予定です。改めてご連絡致しますので、しばらくお待ちください。

次回の日本中小企業学会第 43 回全国大会は、2023 年 9 月 30 日 (土)・10 月 1 日 (日) に近畿大学で開催されます。

2022 年度 新規加入会員

■個人会員 30名

部会	氏名	所属機関	紹介会員	
東部	泉 貴嗣	小樽商科大学	池田 潔	前田啓一
東部	岩岡博徳	東洋大学	山本 聡	安田武彦
東部	木下 潔	東洋大学	山本 聡	安田武彦
東部	栗井英大	長岡大学	張 文婷	山下紗矢佳
東部	小林章一	経済産業省中小企業庁	池田 潔	山下紗矢佳
東部	田浦 元	広島経済大学	山本篤民	和田耕治
東部	西野友浩	経済産業省中小企業庁	山本 聡	岡室博之
東部	藤村まこと	福岡女学院大学	山本 聡	安田武彦
中部	侯 賛	名古屋大学 (院)	弘中史子	遠山恭司
西部	海野晋悟	香川大学	塩谷 剛	木下和紗
西部	大澤圭吾	大阪公立大学 (院)	田口直樹	浜田敦也
西部	太田侑樹	神戸大学 (院)	池田 潔	山下紗矢佳
西部	岡田恵実	流通科学大学	太田一樹	井上芳郎
西部	尾山 真	富山大学	池田 潔	山下紗矢佳
西部	川本 理	㈱ワンプレイス	大熊省三	池田 潔
西部	篠田隆行	金沢大学	前田啓一	池田 潔
西部	鈴木基史	武庫川女子大学	池田 潔	山下紗矢佳
西部	曾我寛人	釧路公立大学	田代智治	関 智宏
西部	田中克幸	昭和女子大学	大熊省三	池田 潔
西部	竇 少杰	立命館大学	西岡 正	山下紗矢佳
西部	長坂泰之	流通科学大学	太田一樹	井上芳郎
西部	中嶋貴子	大阪商業大学	池田 潔	前田啓一
西部	中道一心	同志社大学	池田 潔	関 智宏
西部	原口華奈	大阪産業大学	堀 潔	松永宜明
西部	洪 性奉	就実大学	関 智宏	須佐淳司
西部	山地理恵	昭和女子大学	大熊省三	池田 潔
西部	米倉 穰	滋賀大学 (院)	池田 潔	関 智宏
西部	若林靖永	佛教大学	池田 潔	山下紗矢佳
西部	脇 夕希子	九州産業大学	高田亮爾	関 智宏
西部	渡邊修一	昭和女子大学 (院)	大熊省三	池田 潔

■賛助会員 1件

アイアルマーズ株式会社

日本中小企業学会・本部事務局**【事務局連絡先】**

〒858-8580 長崎県佐世保市川下町 123

長崎県立大学経営学部田代智治研究室 宛

E-mail info@mail.jasbs.jp